

視察調査・研修会等報告書

令和5 年7 月27 日

下記のとおり報告いたします。

小山市議会議長 篠崎 佳之 様

議員氏名(篠崎 佳之



研修・視察年月日	令和5年7月12～14日
研修会場・視察先	佐賀県佐賀市役所 福岡県福津市役所 福岡県福岡市役所
研修名・視察目的	「わいわい！コンテナ」プロジェクトについて 新原・奴山古墳群と近隣自治体との協議会 について ビッグデータを活用した地域包括ケアシステムの実現について
応対者(説明者)の 役職・氏名等 ※視察調査のみ記載	佐賀市経済部中心市街地振興室 藤田泰浩室長、桂智之係長 福津市教育委員会文化財課占部賢課長、世界遺産係池ノ上宏係長 福岡市福祉局総務企画部政策推進課奥田一成課長、ICT 管理係赤木寛係長
参加議員(同行者)	関良平、小川亘、福田洋一、福田幸平、高橋栄、廣瀬武蔵
調査概要	「わいわい！コンテナ」プロジェクトについて 佐賀市は平成の大合併を経て、人口23万人の県庁所在地である。 平成20年に中心市街地活性化基本計画を策定し、住む人、来る人に街を歩かせることが活性化につながると考え、街づくりの基本方針において、4核構想エリア(街なか再生計画)、中央大通りエリア(中央大通り再生計画)、佐賀駅周辺エリア(佐賀駅周辺整備構想)、中心市街地活性化エリアに地域分けをし、エリア価値の向上を計画した。 その中で、4核構想エリアの空き地や駐車場の有効活用と街なかの回遊性向上を図る社会実験として、低予算ですぐにできるプロジェクトとして考えられたのがコンテナの活用であった。わいわい!!コンテナⅠは回遊同線となる商店街や近隣商店の参画を図る仕掛けが不十分であり、接道の歩道幅が狭く、子ども連れが安心して来場できない課題があったため、次のわいわい!!コンテナ2はコンテナ1の反省を踏まえ、コンテナを用途ごとに分けて、交流スペースを敷地の中心に据える配置をとった。 事業スキームは土地は借地、運営はコミュニティ団体ユマニテさがが市から委託を受けている。ランニングコストは年1200万円。コンテナは交流コンテナ、チャレンジコンテナ、読書コンテナ、WC コンテナの4つ。交流コンテナは2時間600円の利用料。チャレンジコンテナは物販、ギャラリーに利用され、最短1日から最長1か月利用で、1日1200円、1か月24

視察調査・研修会等報告書

000円午後6時までの営業となる。読書コンテナは閲覧用の雑誌、絵本、漫画があり、無料で読める。WC コンテナはトイレのほかおむつ交換・授乳スペースが設置されている。成果として、チャレンジコンテナからの本格出店者がでたり、コミュニティ活動の場所の提供に寄与している。

新原・奴山古墳群と近隣自治体との協議会 について

福津市は人口6万8000人、福岡県の北部、福岡市と北九州市の間に位置し、太古より海を介して人や文物の往来が頻繁に行われてきた地域である。古墳時代には宗像氏が津屋崎古墳群を造り、この内の新原・奴山古墳群が平成29年に宗像市の沖ノ島および宗像大社などと一緒に「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺跡群」として、世界遺産に登録されている。

登録後、福津市は福岡県・宗像市と沖ノ島の所有者である宗像大社の4者で保存活用協議会を組織している。これは登録前、世界遺産登録に向けて、世界遺産推薦書案の作成や遺産群の学術調査・国内外へのPR 活動を行うため、福岡県・宗像市と協力して世界遺産推進会議を設置したが、改めて、行政と神社で遺産群の保存・周辺環境の保全・公開活用を目的としたためである。その活用として、古墳まつりの開催や認知度アップのため、世界遺産沖ノ島検定を開催している。

平成19年に知名度や沖ノ島が考古遺跡としてわかりにくいとして世界遺産の暫定リストから外れたことがあり、苦労している話もお聞きした。

協議会運営の福津市の負担金は1/8であり、宗像市が3/8、福岡県が1/2となっている。国からの補助金もある。

ビッグデータを活用した地域包括ケアシステムの実現について

福岡市は人口163万、県の北西部に位置する九州の中心都市である。高齢化率21%であり、やはり高齢者が増えている現状がある。

厚生労働省が目指す地域包括ケアシステムは、保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくとしており、福岡市ではビッグデータを活用し、医療や介護事業者が情報を共有することにより、負担を軽減し、ケアサービスの向上を図っている。また、地域特性に合わせたケアシステムの構築を支援している。

このビッグデータは行政情報、介護情報、生活支援情報、健康(予防)情報、医療情報を集め、行政や各主体で断片的に管理されていた医療・介護・健診データを住民情報に紐づけて管理している。

この地域包括ケア情報プラットフォームはデータ集約システム、データ分析システム、在宅連携支援システム、情報提供システムからなる。

視察調査・研修会等報告書

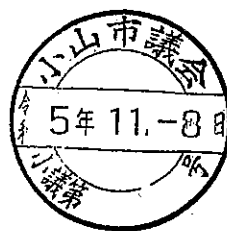
	データ分析システムの一例として、オープンデータを活用し、九州大学と連携することにより、新規の要介護認定の状況と生活習慣等との関連性について分析し、福岡市民の健康寿命の延伸に向けた施策を検討している。 在宅連携支援システムの活用例として、登録高齢者、利用事業所数ともに伸びており、医療情報、介護情報、行政情報、ケアメモが共有され、関係者の負担軽減やケアサービスの質の向上に大いに役立っている。
市政の課題等に対し どのように参考になるか、 所感等	佐賀市の「わいわい！コンテナ」プロジェクトは低予算で空き地を活用し、なお且つ、市の活性化にも役立てる一石二鳥を考えた企画である。小山市でも活かせるのではと思う。 福津市の新原・奴山古墳群と近隣自治体との協議会では、歴史遺産の活用を近隣自治体とどのように連携していくのか参考になった。 福岡市のビックデータを活用した地域包括ケアシステムの実現では、本来国が主導すべき地域包括ケアシステムの構築を福岡市独自に確立しており良き先例である。福岡市と規模は違うが小山市でも導入でいなか検討しても良いと思う。

視察調査・研修会等報告書

令和5 年11 月8 日

下記のとおり報告いたします。

小山市議会議員 篠崎 佳之 様



議員氏名(篠崎 佳之)

研修・視察年月日	令和5年10月12日～13日
研修会場・視察先	八戸市公会堂、公会堂文化ホール
研修名・視察目的	全国都市問題会議 「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」
応対者(説明者)の 役職・氏名等 ※視察調査のみ記載	
参加議員(同行者)	高橋 栄
調査概要	タイトルの通り文化芸術・スポーツを活用して、どのような街づくりをしてきたか、どのような街づくりができるかをそれぞれの立場の講師(東京芸大日比野学長、八戸市熊谷市長、文化事業ディレクター吉川由美氏、東御市花岡市長、鹿島アントラーズ鈴木副社長)から話を伺った。 主報告の八戸市長熊谷雄一氏は、八戸市の文化・スポーツによるまちづくりを歴史的背景と地勢的な条件から形成されていることを話した。 今回の首長によるまちづくりは地勢的な条件を利用して、文化・スポーツの専門家からはその背景を生かしての街づくりの有効性を発信したように感じた。あるものは活用すべきであり、地域には埋もれた宝をどのように活用するかにかかっているのではないかと感じた。
市政の課題等に対し どのように参考になる か、所感等	小山市では地勢的には平たんであり、特性はないが、地理的には交通の要衝にあり、地域の中心都市として発展が十二分に望めるのではないかと考える。文化芸術は一長一短には形成されないものと考えているが、ことアートとなると現代ではどこにチャンスがあるか分からない。 小山市では小さな自慢が山ほどありますと謳っているが、大きな自慢が欲しいところである。

視察調査・研修会等報告書

令和5 年11 月27 日

下記のとおり報告いたします。

小山市議会議長 篠崎 佳之 様

議員氏名(篠崎 佳之



研修・視察年月日	令和5年11月15～17日
研修会場・視察先	愛知県一宮市 尾張一宮駅前ビル 岐阜県大垣市役所 愛知県半田市 (株)バイオクラシックス半田
研修名・視察目的	尾張一宮駅前ビル(i-ビル)について 大垣公園における地域活性化拠点形成のための基盤整備検討調査 について バイオぐるファクトリーHANDA 事業系生ごみ(厨芥類)リサイクル(バイオガス)施設について
応対者(説明者)の 役職・氏名等 ※視察調査のみ記載	一宮市活力創造部指定管理課 田中寛幸課長補佐、伊藤奨主事 大垣市都市計画部公園みどり課辻紳一課長、栗山一嘉整備グループリーダー 半田市 (株)バイオクラシックス半田 サーキュレーション事業本部猪飼幸輝取締役事業本部長
参加議員(同行者)	関良平、小川亘、福田幸平、高橋栄、廣瀬武蔵
調査概要	尾張一宮駅前ビル(i-ビル)について 一宮市は人口38万人、名古屋市と岐阜市に挟まれた繊維産業を基幹とした名古屋市のベッタウンの性格を持つ都市である。 一宮市は市の玄関口である JR 尾張一宮駅前に、平成24年に公共公益施設を主体とした交流文化拠点として尾張一宮駅前ビル(i-ビル)を整備した。地上 7 階、敷地面積約4400㎡、延べ床面積約21400㎡の鉄骨造である。 i-ビル建設には地域再生マネージャー事業を活用し、市が JR 東海から借地し、定期借地権設定契約を2063年3月まで52年半の契約を締結した。 i-ビルは図書館や子育て支援センターなどの複合的な施設で、多用途に利用できるのが特徴である。また交通の利便性を活かして、i-ビルの中心に位置する半屋外のシビックテラスでは様々なイベントを行うことができ、7階のシビックホールでは各種団体の活動や発表の場として使用できる。その他にも大小の会議室や防音構造の多目的ルーム、ビジネス支援センター、社会福祉協議会、日本赤十字社、市民活動支援センタ

視察調査・研修会等報告書

一、子ども一時預かり施設、観光案内所などがあり、シビックテラスに隣接して、カフェレストラン、1階には交番も入っている。駐車場は2～4階に147台、駐輪場も162台ある。

大垣公園における地域活性化拠点形成のための基盤整備検討調査について

大垣市は人口16万人、岐阜県の南西部、滋賀県と三重県に隣接する岐阜県第2の都市である。

大垣公園は市の中心部に位置する大垣城本丸及び二の丸を中心に整備された公園で、明治13年に開園し、長く市民の憩いの場となってきた。昭和25年に戦災復興として、市民広場、野球場を整備し、昭和49年には野球場を廃止し、築山が整備された。現在は芝生広場、遊戯広場のほかに大垣城ホール、大垣城などの運動施設や文化施設がある3.1haの公園となっている。

大垣城ホールは築70年が経過し、施設の老朽化、耐震性、バリアフリー化が課題となっており、早急な建て替えが必要と判断されたものの、その影響は施設稼働率や賑わいの拠点であることから大垣公園全体にかかわることになり、一体的な検討が必要になった。そのため、必要施設の配置や規模の検討、基盤整備の推進と管理運営手法の検討をするため、市民検討委員会を立ち上げ、ニーズ調査のアンケートを実施した。

今後は、アンケートをもとに中心市街地活性化基本計画との整合性を図りながら、賑わいの創出とまちなかの回遊性の向上を図っていく。

事業系生ごみ(厨芥類)リサイクル(バイオマス)事業について

半田市は人口11万8000人、愛知県知多半島の中央部に位置する。

半田市は平成28年に半田市バイオマス産業都市構想を策定し、環境にやさしい資源循環型社会の形成を目指している。バイオマス産業都市とは、地域で発生したバイオマス資源を利用して新しい産業を生み出したり、災害に強いまちづくりを目指す取り組みであり、半田市では廃棄物の再資源化、畜産臭気の低減、農業の振興を目指している。

バイオぐるファクトリーHANDAでは生ごみ(厨芥類)のリサイクル施設として、固形食品、飲料・スープ、牛ふん尿、コーヒー粕をバイオガス発電施設でバイオマス資源として利用し、発生したメタンガスで発電を行い、発電で発生した廃熱や排ガスを隣接する植物工場で活用して、ミニトマトの栽培を行っている。また施設で発生したバイオ液肥は地域農場で活用している。

バイオぐるファクトリーHANDAの施設概要は受入能力日量100t、メタン発酵方式、発電能力800kWとなっている。

視察調査・研修会等報告書

市政の課題等に対し どのように参考になるか、 所感等	尾張一宮駅前ビル(i-ビル)について i-ビルは市が JR から土地を借地して建てた公共の施設であり、一宮駅には JR の駅ビルや名鉄の駅ビルも隣接している特異的な場所である。公共であることで共存していただけるし、駅という交通の要衝であるため、利用者にも至極利便性が高い。正しく小山市に参考になる事例である。 大垣公園における地域活性化拠点形成のための基盤整備検討調査について 大垣公園には稼働率の良い大垣ホールがあったり、大垣市の二大祭りである大垣まつりや十万石まつりに活用される中心市街地のにぎわいの拠点であった。その基盤整備であるため、調査に余念がない。小山市と同規模であり、位置づけも似た大垣市では課題も小山市と似ているため、今後大垣市がどのような施策を講じていくのか興味がある。 事業系生ごみ(厨芥類)リサイクル(バイオマス)事業について 生ごみは焼却すればゴミだが、正しく分別しリサイクルすることによりバイオマス資源に変わる。半田市ではバイオマス産業都市構想で民間の㈱ビオクラシックス半田のバイオガス発電施設の建設により、環境にやさしい資源循環社会の形成を目指している。ただ、搬入には受け入れられるものとできないものがあり、分別には排出事業者の協力が必要である。また、半田市特有の畜産ふん尿の臭気対策の課題解決の意味合いもあったが、市全体の2.5%しか処理しておらず、まだまだ、課題解決には遠いところである。民間活力で生ごみ処理が資源循環社会形成に一役買っているのは興味深い話である。民間事業者も慈善事業ではないので、行政のサポートがないと、利益が出ないのではないか。小山市でも参考にしたい。
---	--

視察調査・研修会等報告書

令和6 年 2月2日

下記のとおり報告いたします。

小山市議会議長 篠崎 佳之 様

議員氏名(篠崎 佳之



研修・視察年月日	令和6年1月9～10日
研修会場・視察先	鹿児島県霧島市 こども館 鹿児島県鹿児島市 天文館図書館
研修名・視察目的	霧島市こども館の設置の経緯と目的、場所の選定について 天文館図書館の管理運営について
応対者(説明者)の 役職・氏名等 ※視察調査のみ記載	霧島市保健福祉部子育て支援課子ども・子育てグループサブリーダー 種子田真理子 鹿児島市立図書館副館長小城裕子、天文館図書館館長松田優子、 館長補佐・チーフ宮ヶ迫真由美
参加議員(同行者)	関良平、小川亘、福田洋一、福田幸平、高橋栄、廣瀬武蔵
調査概要	霧島市こども館について 霧島市は人口約12万5000人、県本土の中央部、鹿児島湾の北側に位置し、鹿児島空港、九州縦貫・東九州自動車道などの高速交通体系が整備されている。先端産業や肉用牛、養鶏、霧島茶などの農業も盛んである。 霧島市こども館は旧国分ハイテク展望台を活用して、こども館設置検討委員会の提案を踏まえて令和3年7月に開館した。敷地面積約15,848㎡、延べ床面積約769㎡の3階建てである。1階にレストランを併設している。 設置場所は市役所から車で約30分かかる工業団地のある標高250mの山の上にあり、アクセスの不便を感じるが、それを差し引いても余りある眺望の良さがある。交通の不便さは委員会でも問題になったが、アンケートで子育て世代の95%が自家用車を保有していることが分かり、現在の場所に決まった。入場料は無料、開館時間は9:30～17:00まで、毎週火曜日と年末年始が休館日となる。 運営形態は事業者へ業務委託。令和5年度予算は29,449千円。庭園管理・清掃・設備保守等は別途業務委託。 鹿児島市天文館図書館 について

視察調査・研修会等報告書

	鹿児島市は人口約60万人、県の中央部に位置し、シラス台地と桜島を有する鹿児島湾に面する高次都市機能がそろった南九州の中核都市。 天文館図書館は鹿児島市の中心地に、令和4年4月にオープンした複合商業ビル「センテラス天文館」内に開館した会話や飲み物も楽しめる新しいスタイルの図書館である。 図書館の運営は指定管理者制度を活用し、年間1億2000万、初期の整備費用は19億円。社会資本整備交付金を活用した。 年中無休で「SHELF EYE」と画像解析 AI によるセルフ貸出機を導入している。
市政の課題等に対し どのように参考になるか、 所感等	霧島市こども館について 霧島市こども館の利用者は霧島市のみならず、鹿児島市や姶良市など鹿児島県内、そして宮崎県など他県からも来訪している。霧島市の利用者は3分の1である。やはり、眺望のすばらしさが単なるこども館の利用でなく、観光の要素も一役買っているのではないだろうか。小山市でも参考になる事例である。 天文館図書館について 鹿児島市は九州新幹線の開通とともに鹿児島中央駅周辺が再開発され、街の中心地が移っていくことを心配し、旧来の天文館地区の賑わいを維持するための一環として、高島屋プラザ跡地に建った複合商業ビルの4・5階に天文館図書館を開館した。そのため、図書館図書館とした図書館ではなく、人が出会う、活用する場所としての価値を高めることにより、賑わいを創出している。もちろん専門的な図書館は必要であるが、いわゆる図書館事業に専門化することなく、柔軟に取り組む図書館が小山市にあってもいいのではないだろうか。 小山市でも参考にしたい。